

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 李 宇玲

本論文は、詩によって賢才を選ぶという儒教的な政治文化理念が、平安朝の宮廷文化と漢文学の根幹をなしていたことを明らかにした論文である。論文構成は、第一部「奈良朝天平期における風流の受容」と第二部「平安朝における宮廷詩と省試詩」の二部からなる。

第一部は、平安朝の宮廷文化と漢文学の本質を、中国的な文化国家の創建という奈良朝以来の課題の継承と展開の相において捉える。第一章「風流と遊宴 六朝から唐へ」は、「風流」の観念が、漢代の儒教的な文化理念を核として、魏晋期の老荘の超俗性、六朝後期の文芸性・遊楽性を加味しつつ盛唐期の宮廷文化に継承されたことを明らかにし、第二章「風流と踏歌 天平宮廷文化の創出背景をめぐって」は、「風流」を理想として掲げた天平期の漢文学に、盛唐玄宗朝の宮廷文化のいち早い受容が認められるとする。

第二部第一章「『経国集』の試帖詩考」は、平安初頭期の勅撰漢詩文集『経国集』に収録された試帖詩(文章生試に課された詩)が、唐代科挙の進士科の省試に課された詩の詩題・詩体形式を模したものであることを明らかにし、平安前期には文章生を経て出身した者たちが、唐代の進士科出身官僚さながらの活躍をしているのであって、日本でもこの時期には詩によって賢才を選ぶという理念が実を得ていたのであると論ずる。第二章「平安朝における唐代省試詩の受容」は、平安朝の公宴詩題にも、唐代進士科の省試詩題が多く取り入れられていたことを明らかにした。とくに、宇多天皇が菅原道真らに課した「霜菊詩」と「未旦求衣賦」は、道真が書いた後者の序文に示された政教的文学観によって従来からも注目されてきたものであるが、この詩賦の課題もまた唐代進士科の詩賦課題を模したものであったことを指摘した意義はきわめて大きい。第三章「菅原道真における近体詩と古体詩」は、天子に詩を献ずる宮廷詩人たることを以て自ら任じていた菅原道真が、近体詩律に徹底的に習熟していたことを明らかにする一方、荆棘の多かった人生の感懐を古体詩に託しているところに、宮廷詩人として括ることのできない詩人的本質を看取する。第四章「夕霧の学問 字の儀式から放鳥試へ」は、放鳥試を省試の遊楽化とする従来の通説を批判して、放鳥試は勅題が慣例であり、天子が省試に親臨して自ら積極的に有能な文人を登用する姿勢を示す意義があったとし、『源氏物語』において夕霧の省試が放鳥試に設定されたことは、光源氏の二条東院で催行された字をつける儀式とともに、光源氏と冷泉帝によって領導される文治聖代の到来を描出するものであったとする。

本論文は、第一部第二章の考証にやや不十分な所を残しているが、第二部で、唐代科挙の進士科において詩賦が課せられていたことが、従来考えられていた以上に平安朝の漢文学に深い影響を及ぼしていたことを実証的に明らかにした功績はきわめて高く評価できる。よって本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位に値するとの結論に達した。